

障がい児教育部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

一人一人が生き生きと学習し、自主的・主体的に活動できる子どもの育成
～ 子どもの力を高めるための、個々の発達段階に応じた指導・支援のあり方 ～

1. 研究の経過

第24期までの研究で、教育的ニーズに応じた個別の指導計画・支援計画を、将来の豊かな生活と自己実現に向けた将来像を描きながら、計画、実践、評価、改善するサイクルを確立した。第25期の研究では、このサイクルを効果的に生かしながら、「子どもの発達段階を考慮し、実態と教育的ニーズの把握に基づいた指導・支援」の研究をしてきた。

2. 研究主題設定の理由

一人一人の状態像を把握し、発達や年齢に応じた配慮をし、将来像を持ちながら、適切な指導内容を検討することで、一人一人に見合った教材、情報、環境、学びの場が明らかになると考える。子どもの発達段階やニーズをより正しくとらえて指導・支援しながら、キャリア教育の視点を含め、積み上げることによって子どもの力をさらに高めることができると考え、本主題を設定した。

3. 研究仮説

一人一人の発達の段階を考慮し、実態とニーズを的確に把握した上で、子どもの将来を見据えて指導計画や支援計画を作成し、それらをもとにした、的確な指導・支援をすることによって、子どもの力が高まり、生き生きと学習し、自主的・主体的に活動することができると考える。

4. 研究内容

研究内容 1

- 障がい別研究 -
各部門ごとに専門性を高めるための授業研究、実践交流、講演会、学習会の開催

研究内容 2

- 共通研究 -
各部門の共通研究として年3回の研修会実施
テーマ ①理論研修
②心理検査の実技研
③言語理論研修

研究内容 3

- その他の研究、研修 -
①スタート交流研修会
(平成28年度)
②新入会員歓迎研修会
③教育課程委員研修会

5. 研究方法

(1) 部門別研究

・障がい種別に4つの部門（知的、自閉症・情緒、言語、肢体）を設置し、それぞれの障がい種別に、専門的力量を高めるための研修活動を行う。
(自閉症・情緒部門には「発達障がい児教育グループ」を含む)
※ 部門別の研究テーマに沿った内容で授業研や研修会を行う。

(2) 共通研究

・障がい児教育全般に関わる共通の課題について研究する。
※今年度は『心理検査の実技研：心理検査(WISCIV)の方法と活用①・②』
『理論研修：講演会 発達障がいのある子どもへの支援と支援システムの構築について』
『言語理論研修会』

(3) 教育課程委員研修会

・児童生徒の実態に応じた教育課程について研究する。知的障がい児教育部門が担当し、知的障がい児教育の教育課程の編成を行う。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

- 4月 6日 (水) 第1回役員研修会
・障教部体制の確認、年間計画の検討、第一次研究協議会案検討
- 4月12日 (火) 専門部会一次研究協議会、共通研究推進委員研修会
・2016年度研究計画、部会運営、研究体制、事業計画、スタート交流研修会・新入部会員研修会について検討
- 4月28日 (木) スタート交流会
・2016年度研究計画、部会運営、研究体制、活動計画、部門の研究体制と活動計画
- 5月17日 (火) 新入部会員歓迎研修会 新入会員49名、役員等13名参加 (於:石狩教育研修センター)
・障がい児教育部会研究体制及び各部門の活動内容について説明
・部門ごと小グループ(6グループ)に分かれて、新入会員の学級の様子や現在の課題等の交流、課題に対する討議、各部門研究員からのアドバイスなど

○石狩管内で初めて特別支援学級を担当する会員を対象に、障がい児教育部会の活動の様子などを説明し、活動や研究の内容について理解してもらう事をねらいとして実施した。
グループ討議は1グループ5～6名の新入会員に、1～2名の役員がアドバイザーとなり、新入会員の各校での様子や課題を聞き、交流した。
・グループ討議がとても勉強になった。様々な児童のようすが交流できてよかった。
・各部門の活動内容については、概要を知るのにとってもわかりやすく、勉強になった。理解が深まった。
・初めての特別支援学級なので同じような先生方と意見の交流ができてよかった。
など概ね好評価だった。今年度の成果を生かし、次年度以降につなげていきたい。

- 6月 9日 (木) 第2回役員研修会
・新入会員研修会のまとめ、第二次研究協議会の検討等
- 7月 1日 (火) 第1回共通研究研修会 (「IV 実技理論研修」の項に記載)
- 7月7・8日 (金) 第2・3回共通研究研修会 (「IV 実技理論研修」の項に記載)
- 7月15日 (金) 第1回拡大役員研修会
・第二次研究協議会要項等の検討
- 7月27日 (水) 言語理論研修会
- 8月23日 (火) 第3回役員研修会
・第2次研究協議会開催要項、会場校準備、その他運営について検討
- 9月16日 (金) 第2回拡大役員研修会
・第2次研究協議会開催要項、会場校準備、その他運営について提案、協議
・第2次研究協議会レポート集帳合
- 10月13日 (木) 第二次研究協議会役員事前研修会
・第二次研究協議会業務確認、準備
- 10月14日 (金) 専門部会第二次研究協議会、役員選考委員会 (2. 専門部会第二次研究協議会での交流に詳細)
・公開授業と事後研究:富丘中学校、北進小中学校、北栄小学校、向陽台小学校、祝梅小学校、千歳中学校
・全体会、部門別研修会、役員選考委員会:富丘中学校
- 11月22日 (火) 第4回役員研修会
・第二次研究協議会のまとめ
- 12月 8日 (金) 第5回役員研修会
・次年度の研究について検討
- 1月20日 (金) 第6回役員研修会 2016年度活動の評価、2017年度活動計画の協議
- 2月16日 (木) 第3回拡大役員研修会 2016年度活動の評価、2017年度活動計画の協議

Ⅱ 研究の成果と課題（第二次研究協議会より）

1. 知的障がい児部門

(1) 授業研究の実践・成果と課題

①千歳市立北進小学校

「テレビ局を紹介しよう」（授業者：山田由加里教諭ほか）

○自主的に動いていけるよう、声かけをしてきた。子どもたちは、自分のやるべきことを理解していた。児童3人グループのところで、上手にコミュニケーションがとれていた。指示された内容を理解して進められる子どもと一緒にするグループ構成した。そうすることで、やりとりがスムーズにすることができた。特別支援学級のみで学校が運営されていることもあり、自己肯定感を高めていける環境が整っていると感じた。やる気スイッチの方法の一つとして、カレンダーに予定を書き込むことで、子どもたちが見通しが持てるようになり、意欲的に授業に参加することができた。いろいろな子どもたちの実態に合わせて、キャリア教育の授業を組み立てたと感じられる授業だった。

②千歳市立祝梅小学校

「重さ」「水の量」「くらべかた」（授業者：石川恵、菅野信吾、疋田美穂教諭ほか）

○習得と活用を目指した学習内容で授業が行われた。Aグループでは、経験の中から身につけて欲しいという思いで、かさに関連づけて重さの学習が行われた。初めて色々な量をはかったが、楽しそうに活動していた。Bグループでは、教育課程に近いものを取り入れて学習を行ってきた。1Lの入れ物にこぼさないように水を入れる活動は、子ども達にとって難しい活動だということが確認できた。活動は、どれも意欲的に取り組んでいた。Cグループでは、子どもは、自分の入れたい容器を選ぶため、教具に気持ちが持っていかれてしまうことがわかった。課題としては、比べるための動機をつける必要がある。定着には時間がかかる。繰り返しの学習が必要。生活に関連づけて「くらべてみたい」という気持ちを持たせることが必要だということが確認された。

③千歳市立北進中学校

「修学旅行編」「現場学習編」（授業者：長部 京、遠藤 絵里教諭ほか）

○「伝える力」については、日常生活では相手から聞かれたことに対して答えることに難しさがある児童が多い。文章を要約することは難しいが、どの生徒も集中して学習に取り組み、内容を要約しようと努力している姿が見られた。要点をまとめるのに時間がかかるため、時間の確保をしてあげることが必要であることが確認された。

○生徒のモチベーションを高めるため、例年以上のものを作ろうと取り組ませた。意図する展開になかなか進めず苦労した。発問指示がわかりやすかった。当日授業に参加できない先生に子どもたちからそのような質問の内容をあらかじめ事前にインタビューしておき、映像を流すなど視覚を利用した工夫がとても素晴らしかった。

(2) 分科会

①3つのワークショップを行った。

○図工題材・臨床美術ミニ体験（千歳市立東小 阿部 陽子教諭）

・臨床美術とは、認知症の脳のリハビリとして開発され、現在は発達に気になる子どものケアや社会人向けのメンタルヘルスケアなどに取り入れられている。今回は、右脳を使って数字を3つ使ってデザインしたり、ぶどうの絵を描いた。子どもたちと一緒にすぐに取り組める内容であった。

○教材作り（石狩立花川北中 泉 多恵子教諭）

・図形の周りの長さや面積。かけ算九九の早見表（HDケース、厚紙、色画用紙、はとめ）。月の満欠（カメラのフィルムケース、折り紙（黒・青））など、多く紹介された。参加された皆さんはとても楽しそうに作業をしていた。作り終わったものを「これから使う楽しさ」を感じている様子だった。

○ダンス（江別市立大麻泉小 三好 学教諭）

・リズムよく準備体操を行ったり、アップダウンのリズムをとったり、基本的な体の動きの練習を行った。RYUSEIやポッキーダンスの動きを習い、曲に合わせて踊っていた。全員が意欲的にダンスに取り組まれ楽しい時間となった。

②分科会

○レポート交流では、小グループに分かれて、それぞれの実践報告を行った。小グループで交流したため、質問や意見がしやすく、気兼ねなく各学校間での話をするのができ、理解を深めることができた。

(3) 今年度の成果と課題

①今回の二次研究協議会では、たくさんの先生方に授業を公開していただいた。授業公開、事後研を通して、今年度の研究主題とした「社会的自立を見据え、自己肯定感を高める指導・支援の工夫」に様々な教科からアプローチができた。授業は、どれも今後のモデルともなるべき内容で、持ち帰って自分の学級で実践したいという声が多く聞かれた。

②分科会のワークショップは、即実践に活かせる内容で、それぞれの実践を多くの部員で共有し、充実することができた。次年度以降、時間的な問題と講師の確保が課題。

③レポート交流については、他校の実践や活動内容を知れて良かったという内容のものやワークショップをすることで時間が少なくなるので必要ないのではないかという両方の感想が出された。各自の個人研究のレポートの提出を求める以上、交流の必要性はあるが、色々な意見が出されているので、運営に関しては、今後検討していくことが必要である。

2. 自閉症・情緒障がい児教育部門

(1) 授業研究の実践

○小学校

・北地区会場…千歳市立北栄小学校 たんぽぽ学級

単 元 名 体育科「北栄小オリンピックをしよう」

指 導 者 山端 宏和、高塚 淳嘉、鈴木 彩華、舞島 弘平、千阪 直子、西田 安志、岩田 祐里教諭

介 助 員 堀之内 美穂 高野 和美

授業の内容 いろいろな種目に取り組みながら、運動姿勢を維持する力や体の動かし方、物と自分の距離や動きに対応して自分の動きをコントロールするなどの調整力の向上を図る。

・南地区会場…千歳市立向陽台小学校 あおぞら学級

単 元 名 生活単元「命を守る」

指 導 者 江尻 聖、安保 直子、外崎 哲也、小笠原 香 教諭

介 助 員 上野 順恵

授業の内容 学校や家庭で地震が起きた場合の身の守り方や千歳市の防災マニュアルに沿った避難所生活体験を実施し、子どもたちに自らの命を守るために必要な知識を身につけさせ、防災への意識を高めさせる。

○中学校

千歳市立富丘中学校

単 元 名 美術科「色をつくる」

指 導 者 村中 幸治、山口 著子、佐々木 大輔、佐藤 絢 教諭

介 助 員 梶原 昭

授業の内容 表現活動での基礎的知識を身につけ、これからの活動に役立てていくことを期待すると共に、その過程での表現活動や互いの交流などを通して、個々の自立や社会性を育成する。

【授業実践の成果と課題】

小学校の2会場においては、体育科と生活単元の授業が行われた。北栄小学校、向陽台小学校とも授業形態こそ違っていたが、コミュニケーションや自己理解、集団参加、心理的な安定を育成することを目標とし、児童が将来自立した生活をする上で必要な力を成長させる授業がそれぞれ行われた。

中学校においては、富丘中学校において美術科の授業が行われた。こちらも表現活動的な要素だけでなく、生徒間の交流や協力を通して集団参加していく力を育て、生徒の自立心や社会性を育成するものとなった。

各会場の事後研において、成果と課題が活発に議論された。内容は先述した通りである。教科・領域の枠組みにとらわれず、会員各自が幅広い視点で児童・生徒の詳しい実態把握をした授業実践を行い、2年間にわたる研究の礎を作ることができた。この成果を活かし、次年度以降の研究につなげていきたい。

(2) 課題別研修

自閉症・情緒部門においては、日常の実践の中で使用した「自作教材の見本市」を開催した。課題別研修は、今年度からの取組のため、まだまだ勝手のつかめないところがあったが、紹介者と参加者の先生方の協力もあって実りある研修を行うことができた。

(3) 部会研修

今年度は、同時間帯でシンポジウム形式の研修会と意見交換会形式のレポート交流会を行った。研修会では、千歳市教育委員会の川除主査を招いて、千歳市の特別支援教育の現状を中心に話題提供と助言をしていただいた。レポート交流会は、少人数で構成したことも功を奏し、和やかな雰囲気の中で意見交流がされた。このような形での部門研修は初めての取組であったが、とても有意義な研修となった。

3. 言語障がい児教育部門

- (1) 研究主題 ことばを支える「心の育ち」を大切にした支援のあり方を考える
～ 「ことば」と「心の育ち」の関係性を探る～

(2) 研究目的

「ことば」とは、さまざまな力を土台にして、他者とのコミュニケーションを繰り返す中で獲得され、身についていくものである。「ことば」を獲得する過程には、様々な感情や気持ちが子どもの内面に存在している。このような子どもの内面を総称して「心」と表現し、「心の育ち」を大切にした支援のあり方について考察する。そのために、発達項目の情報だけでなく、周りの人との関係や育った環境がどのように影響してきたかを把握し、支援者の一人として担当者のかかわりはいかにあるべきかについて研究する。

(3) 研究内容

- ①ことばを獲得する子どもの内面にある複雑な感情や気持ちと、ことばの発達の関係を探る。
- ②他者との関係や環境が子どもの内面へ与える影響について探る。
- ③支援者の中の一人として担当者のかかわりはいかにあるべきかを探る。

(4) 全体学習会

○事例研究 〈発表者〉 千歳市立緑小学校 相蘇 実裕 教諭

事例概要

・小学校4年生、男児（9歳） 心理的に不安定になりやすく、衝動性や攻撃性が現れる。言語理解・表現の苦しさから、周りの子どもたちとのトラブルや教室を飛び出してしまうなど、学校生活での不適応が起きている。

本児の特性は、生まれ持ったものなのか、家庭環境など育ちの要因なのか判断は難しい。どちらか一方ではなく、両方が相互に影響して問題が発生したと考え、指導支援の仮説をたてて指導してきた。

研究討議概要

相談から現在までの様子がまとめられたレポートや各種検査結果をもとに、質疑応答の中で本児の実態や家庭の状況などを確認していった。本児にとって、安心・安全な環境を設定し、人と関わるのが楽しいと思えるような関わりをもつことによって、明るい表情で登校し、楽しく学校生活をおくれている様子である。

道言協の発表に向けて、検査結果や子どもの様子をさらに詳しく分析し、言語面の課題やコミュニケーション力についてなど、より具体的に探る必要があると話し合われた。

(5) グループ研究

経験年数をもとにランダムに選ばれた、AからDの4つのグループに分かれて研究を行った。グループごとに事例をもとに話し合ったり、理論研修を行ったりして研究を進めてきた。研修内容は「ことば通信」や「レポート集」などで部会員内に交流してきた。

(6) 全体研修会（特別支援教育 理論研修会）

平成28年7月27日(金) 13:30～16:00 於：石狩教育研修センター

「身体の気づきから始める言語活動支援・指導の実際～運動制御論とシェルボーンムーブメントなどの実践から～」
瀧澤 聡 氏（北翔大学生涯スポーツ学部）

通級指導教室での指導経験から、通級に通う子どもたち（主に発達障害児）の、不器用（粗大運動）の問題解明にチャレンジ。運動制御論とシェルボーンムーブメントの実践から、言語活動や学習活動の支援やエビデンスの大切さ、多面的児童理解、通級の教員としての心構えなどを幅広く教えていただき、今までの指導を振り返る、これからの指導のヒントとなる研修会だった。

(7) 第二次研究協議会

○事例発表：北広島市緑ヶ丘小学校が中心となり、各校の啓発授業の実際について交流した。

○課題別研修：江別市立大麻東小学校の河内教諭が講師となり、「吃音」について、実際の指導の様子や、VTRをもとに教えていただき、言語担当者のみでなく、ほかの障害種の参加者にも吃音に対する理解を深めるきっかけとなった。

○グループ研修：AからDのグループに分かれ、事例を持ち寄っての研修を行った。

4. 肢体不自由児教育部門

(1) 研究の内容

障がいを持っている子どもたちの行動（活動）範囲というものは限られてしまう。小・中学校や、高等支援学校等きめ細かな支援が施されているところではある程度のことはできるが、社会に出て自立するとなるとその選択は極めて限られたものになってくる。特に身体に障がいを持つ者は、移動や生活空間に制限がある場合が多く、そうしたバリアを克服する体力や精神力を養わなければならないと考える。石教研肢体不自由児教育部門ではそうした児童・生徒が学校生活で色々なことを体験する中で、自立心が芽生え、できることを増やし、たくましく生き抜いていくことを目的とした日常の研究実践を進めてきた。

肢体不自由児教育部門の研究（16年度の研究）

- ・研究主題 「児童・生徒の発達段階やニーズに合わせた支援の工夫」
- ・研究の内容 ア、将来を見通した授業や行事の工夫
イ、支援体制の整備と関係機関との連携
ウ、教育課程や評価のありかた



(2) 今年度の研究の成果

①授業研

第二次研究協議会では千歳中学校の千葉大輝教諭の自立活動の単元「オリジナルベースボール」の授業を参観した。本児が野球好きということで興味関心があるこの単元を設定した。事後研では、取り組み初めの頃と比べての変化や自立活動の取り組みについて授業者から感想があった。参観者からは、年間を通しての通常学級の授業の参加について、通園センターの方の指導について、指導案にそってなどの質問があった。また、姿勢を保って声を出すことや発声する前に唾液をのむことについてなどのアドバイスをいただいた。久しぶりに肢体独自の授業だったため、参加者にとってはとてもためになる授業になった。

②課題別研修会

「障がいのある児童生徒の食べることの発達とその支援」いうタイトルで真駒内養護学校の皆川悦子教諭に行っていた。摂食・嚥下障がい児の食事場面の理解の視点や口腔内感覚について、食事とコミュニケーションの大切さなどを学習した。また、実習としておせんべいを食べたり、お茶を飲んだりしながらどのような行動をしたか振り返り、介助される体験を行った。肢体不自由学級を初めて担当することになった先生も多いので、今後の指導・支援において勉強になる話であった。



③部門別研修会（実践レポート交流）

日常的な学校生活の中で、日々工夫と苦勞をしながら授業実践に取り組んでいるレポートの交流は、毎年楽しみにしている一コマである。肢体不自由の児童・生徒と学習を行っていくための指導書はない。授業者が工夫しなければならないのである。レポートの内容は、自立活動や各教科の授業実践や日常の授業の工夫、就学指導についてなど多岐にわたる内容であった。普段の悩みなどもお互いに話し合いができてとても有意義な時間であった。

(3) 今後の課題

肢体不自由児学級担当の経験年数が少ない先生方にとって、授業について話し合いができたことをは意義があった。また、自立活動や授業や行事、交流学习などについて交流ができてよかった。今年度は嬉しいことにレポートの数が多かったのであまり深く話し合うことができなかつたことと、進路指導についてや教育課程、評価（あゆみ）などについて話し合うことができなかつたので、今後レポート交流のしかたを検討する必要がある。

Ⅲ. 教育課程の研究

1 経過

- 4月28日 第1回教育課程委員研修会
- 7月1日 第2回教育課程委員研修会
- 11月22日 第3回教育課程委員研修会
- 1月20日 第4回教育課程委員研修会

2 研究内容

教育課程委員研修会ではキャリア教育についての冊子を作成することになり、今年度はまずキャリア教育についてのおさえを委員の中で確認した。その後、知的部門のレポート作成時に「キャリア教育」の視点を入れて作成することを各校に依頼し、レポートの作成に至った。

また、各市町村においてデイサービス等、福祉サービスの状況を調査した。

今後は来年度の冊子の具体的内容について検討をしていく予定である。

Ⅳ. 実技・理論研修会

1. 実技・理論研修会の内容

- ・共通実技研修 「心理検査の方法と活用 (WISCIV)」基礎編 応用編
平成28年 7月 7日(木) 8日(金) 14:00~16:30実施
講師 北海道立特別支援教育センター 田野 大介 氏
(参加人数 2日間合計 110名)



- ・共通理論研修「発達障がいのある子どもへの支援と支援システムの構築」
平成28年 7月 1日(金) 13:30~16:00実施
講師 北海道教育大学釧路校教授 二宮 信一 氏
(参加人数 75名)



- ・言語理論研修 「身体の気づきから始める言語活動支援・指導の実際
～運動制御論とシェルボーンムーブメント等の実践から～」
講師 北翔大学准教授 瀧澤 聡 氏
(参加人数 76名)

2. 研修会の成果

＜成果と課題＞

実技研修会においては、実際に検査器具を用いて参加者同士で検査をかけ合うなど、実践的な活動を通して検査の内容を知ることができた。また、検査結果からのアセスメントについても知識を得ることができた。参加者からは、来年度も引き続きWISCIVの研修会を望む声が多く聞かれた。

理論研修会においては、特別支援教育が置かれている現在の状況や課題、方向性について講師の方から見解をいただき、参加者一人一人が現場での自身の関わり方について振り返ることができた。インクルーシブのポイント、ユニバーサルデザインの考え方、集団作り、普通学級との交流などの視点で発達障がいを抱える子どもの環境について研修を深めることができた。今後も、参加者のニーズに応じて理論的に特別支援を考察できるような研修会を予定していきたい。

V. 部会研究の成果と課題

1. 成果

自主的・主体的に活動できる子どもの育成をめざして、今年度と来年度の2年間にわたり、「子どもの力を高めるための個々の発達段階に応じた指導・支援のあり方」を目指して研究を進める。

部門別研究では、部会研究主題を受けて設定した部門別の研究主題に即して、授業公開と事後研究や、ワークショップ、学習会、実践レポート交流などが行われた。それぞれの部門で子どもが生き生きと自主的に学ぶことのできるの指導・支援のあり方、そして子ども一人一人の力に応じて力を高めるための支援方法や授業づくりについて研修した。また、各関係機関との連携をしながら一人一人の発達段階に応じた教育支援のあり方について研究を進めることができた。

第二次研究協議会開催にあたっては、千歳地区の各小中学校に多くの公開授業を設定していただいたおかげで、参加者がじっくりと授業実践を参観し、事後の話し合いを行い、研修を深めることができた。知的部門ではワークショップを行い実践に役立つ研修をすることができた。自閉症・情緒部門では、教材作りや、実践レポート、さらに講演を通して研修を深めることができた。また言語部門では事例研究を通して、また、肢体不自由部門では、講師を招き、個々の児童生徒の障がいについての基礎的な知識と、それに伴う困難さや、自立した生活のための具体的支援のあり方など具体的に講義していただいた。

さらに、今年度初めて部門を超えて参加するこのできる課題別研修を設けた。通級やコーディネーターなど、これまで交流できなかった領域の交流をすることができた。また、部門の枠を超えて興味のある部門に参加できるなど大変有意義な研修ができた。

共通研究研修では、発達障害のある子どもへの支援について学習することができ、好評であった。また、WISCIV検査の演習をし、検査結果の分析と活用について研修する機会を持つことができた。

2. 課題

特別支援教育の本格実施により、各市町村で多くの特別支援学級が開設されている。それにより、特別支援を担当する教員の数も増え、組織全体が400人に迫る規模になってきている。初めて担当する会員も全体の3分の1近くの数になってきている。規模の変化にあわせて、レポート集の作成方法や、第二次研究協議会の授業会場の設定等、人数の多い中でより効果的に進めることができるように工夫する必要がある。一方、会員数が増えることで会員個々の本部会に期待する内容も多岐にわたってきており、だれもが研究の成果を十分実感することの難しさを感じる。

第二次研究協議会や実技理論研修、各部門研修の中だけで部会員のすべての希望に応えることは難しい。このため、児童生徒の発達と困難さを理解するための研修や、授業実践を通して交流しながら、明日の授業に行かせる研修をするために、児童生徒の将来の生活像を知るための理論研修や実技研究や視察など、複数の研修内容を2年間の中で行い、関連付け、トータルで深めることのできる研修を試行していく必要がある。

※各章の文責

- I 研究の概要：渡部美喜子（江別市立江別太小学校）
- II 1. 実践研究の経過と成果：渡部美喜子（江別市立江別太小学校）
2. 専門部会第二次研究協議会での交流
 - (1) 知的障がい児教育部門：三好 学（江別市立大麻泉小学校）
 - (2) 自閉症・情緒障がい児教育部門：山端宏和（千歳市立北栄小学校）
 - (3) 言語障がい児教育部門：小林雅美（当別町立当別小学校）
 - (4) 肢体不自由児教育部門：清水泰仁（石狩市立紅南小学校）
- III 教育課程：大西 裕美子（北広島市立双葉小学校）
- IV 実技理論研修：遠藤 絵里（千歳市立北進中学校）
- V 部会研究の成果と課題：渡部美喜子（江別市立江別太小学校）

（文責：渡部美喜子）